

1月11日ゼミは開催します

古代国家の成立Ⅱ：倭国から日本へ

—1月11日ゼミの紹介：齊藤 潔会員記—

古代国家の成立Ⅰでは、大和に登場したヤマト王権が5Cに中国南朝の宋と齊に倭の五王として朝貢し、初めて倭国が国際社会に登場した。最後の倭王武は、夫々、安東大將軍、鎮東大將軍の称号を授与された。

倭王武は、『日本書紀』以下『紀』記載の雄略に比定される。『雄略紀』には百濟救援と高句麗・新羅との戦闘、朝鮮渡来人や宋人を重用した事、又、権力闘争では外戚で大豪族葛城氏や他の王族の抹殺記事が記載されている。又、『好太王碑文』や『宋書倭国伝』の記載から、4C末～5Cが朝鮮半島へ武力出動が行われ、その背景に鉄素材（鉄鋌）の確保があった事を述べました。この武力偏重の内外政策は、結果として内憂外患と王位候補者の不在をもたらしました。そこに登場したのが6Cの継体です。

『継体紀』記載の「応神5世の孫」という表現は文飾である。継体は畿内の既存有力豪族を基盤にしている。彼は強力な軍事力を保持した河内の新興騎馬集団の支持があった。これに相乗りしたのが、畿内の有力豪族（大伴・物部・許勢ら）である。継体は新王統として、旧王統の手白香王女を皇后とし欽明を儲けた。欽明王統は、4人の子女（敏達・用明・崇峻・推古）が王位につき、約100年間続いた。

継体・安閑・宣化・欽明朝（507～572年）では、伴造制・国造制・部民制という国制が整備された。しかし、この三制度は、国家機構の三要素である官僚・徴税・強制力（警察・軍隊）とは見做せずその前段階に留まった。以上が、前回ゼミでの要旨である。尚、時間の関係で触れなかった水野祐氏

の「三王朝交代説（崇神王朝・応神王朝・継体王朝）」について、述べたいと思います。最初の崇神王朝（三輪王朝）を最初のヤマト王権とし、次に中間の応神王朝（河内王朝）を『宋書倭国伝』の「倭の五王」に読み替えが可能であれば、継体王朝を含む三王朝説は基本的には賛成である。即ち、応神王朝の「倭の五王」への読み替えというのは、『神功紀』に記載のある七支刀の銘文は、4C後半の百濟から倭王への七支刀の贈与を表示しているが、その見返りは対高句麗への倭兵の出兵要請と解釈されている。この解釈は『好太王碑』文や『宋書倭国伝』からの飽く迄類推である。又、『応神紀』の渡来人や百濟来倭記事は、5C後半の『雄略紀』の記事と重なり、読み替えた次第である。

さて、今回のゼミでの要点を述べます。

- 1、冒頭で、前回ゼミでは説明が不十分だった伴造制・国造制・部民制の要点を説明します
- 2、ヤマト王権は王と畿内有力豪族（大臣・大連・大夫マエツキミ）の連合体ですが、その関係は支配—従属ではなく、相互依存関係であります。この関係は平安期の天皇と摂関家まで続きます。
- 3、推古（592～628年）の政治
 - ① 聖徳太子の業績は文飾である。
 - ② 遣隋使留学生・僧（全て渡来人）の派遣は、未開から文明路線への転換である。
 - ③ 対朝鮮外交は、三国（高句麗・百濟・新羅）と国交を持つに至った。
- 4、蘇我氏について：稲目と馬子の活躍。馬子の王（崇峻）殺し。飛鳥宮。
- 5、舒明：遣唐使の派遣。仏教を国教とした王。
- 6、乙巳の変と大化改新論
 - 乙巳の変の実行役は中大兄。
 - 大化改新の主役は孝徳である。孝徳は帰国した遣隋・唐の留学僧や生を配下に律令制に着手

した。

7、天智（斉明）外交の失敗：百済に肩入れして白村江戦を主導して、唐・新羅に敗北し、国難を招いた。

8、天武・持統の時代

○敵国状態にあった唐を牽制する為に、唐と交戦状態にあった新羅と同盟し・軍事援助を行い、約10年間で新羅に勝利（朝鮮半島統一）を齎して、唐からの圧力を減殺させた。

○壬申の乱は、白村江戦の敗北による豪族の損害を清算できなかった天智側の無策（部曲の復活のみ）が原因である。天武側は畿内豪族や地方豪族を味方にして勝利した。

○律令と国史の編纂開始・新京完成（689年飛鳥浄御原令完成・694年藤原京へ遷都）。

○金光明経（護国仏教）の採用。

○大津皇子事件(天武の死後直後に起きた)の真相

9、文武の時代：倭国から日本へ

○701年大宝律令完成：飛鳥浄御原令を継承し、これに律を加えて完成した。

10、702年に粟田真人が遣唐使として大宝律令を持参して出航し、703年に則天武后により国号日本の承認を得た。併せて、704年の帰還船で白村江戦での最後の捕虜3人も帰国し、唐との戦争状態も解消した。以上

ゼミ会場と時間 13:15～16:50

- 1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
- 2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分
都営三田線水道橋駅はエレベータ使用可。
- 3、会場には12時30分から入場できます。

総本宮:久留米水天宮にまつわる話あれこれ

参 平家：安徳天皇潜幸説

— 松石 賢治会員記 —

1. はじめに

久留米水天宮は、平家に関わりが深く民間信仰に支えられた特異な神社である。令和6年宮司となった真木啓樹氏は、平知盛の孫平右忠^{いつき}儕から数えて第29代目となる。因みに幕末、勤王の志士として活躍した真木和泉守は第22代目となるという。

通説では、寿永4年3月（1185年）、壇の浦の合

戦で安徳天皇をはじめ、棟梁：平知盛、資盛、家長ら平家一族はことごとく海に投げ滅んでしまった、といわれている。

同年7月佐伯景弘らが海中を探索したが安徳帝のご遺体も宝剣も発見できず、阿弥陀寺陵が安徳帝の御陵と定められたのは明治時代であった。



【阿弥陀寺陵（下関）】

鎌倉時代に書かれた『吾妻鏡』では、「先帝、海底に没し御す」と書き、海に入る人々、生虜の人々を挙げた。更に身投げした後に助けられた生虜の人々の中に安徳帝いて海に飛び込んだ按察使局伊勢がいることをく先帝ヲ抱キ奉リテ入水ストイエドモ存命ス>と不審げに書いている。・・大人の按察使局伊勢が助けられて、それより軽い幼帝が浮かびあがらないとは・・と疑いをかけている。

ここに安徳帝潜幸説が浮上する。

幾つかの潜幸説（荒唐無稽な話ではあるが）のなかで、久留米水天宮と係わりが深い逃避行説を紹介する。

2. いざ壇の浦決戦へ

①壇の浦への布陣

一の谷の戦いで敗れた平家方は、平宗盛が屋島（讃岐）に陣営を置き、平知盛は源氏の九州・四国に上陸を阻止するために彦島（長門）陣営を置いた。しかし、屋島の戦いで致命的な敗北を帰し、安徳帝ら平家一門は瀬戸内海を西に遁れ、大宰府へ辿り着いた。安徳帝らは僅か70名であり、安徳帝は発熱し療養中であった。

②源氏方源義経の使者

とそこに源義経の使者が訪れ、壇の浦で一線を交えようとの事。平家方は安徳帝・二位尼・按察使局伊勢を残して出陣した。軍兵は一千余、軍船は千余艘（内；二十三隻の大船）であり、山鹿勢、松浦党、平家公達勢であった。柳ヶ浦（門司）に安徳帝（身代わりか？）の御座所を設けて軍議を開き、戦略を練った。そして田ノ浦：豊前）沖に軍船を集結させた。一方で先に豊後に上陸した源範頼軍は芦屋浦の戦いで、平家方大宰権少式：原田種直を破りすでに陸路：田ノ浦に布陣していた。

③敵将源義経の提言（身代わり入水）

彦島に陣営を張った平家方は最後の決戦を挑んだが、次第に敗色は濃くなっていく。そこに敵将源義経の提言があり、「安徳帝と二位尼の身代わりをたて落ち延びよ」と。二位尼の忠臣：古賀春時の妻初音（61歳）とその子喜大夫（7歳）が身代わりとなって入水することでその急場をしのご、平知盛・宗清・伊賀平家長らは壇の浦を脱出し落ち延びた。

3. 平知盛らの逃避行のルート（参照；想定ルート図）

①上陸地（田ノ浦：豊前）から平家荘園まで

壇の浦の戦いに敗れた棟梁：平知盛は、乳母兄弟伊賀平家長らと共に遁れ、田ノ浦に上陸し、松ヶ江を越え、長野城主：平康盛を頼り豊前小倉へ落ち延びた。

しかし、城主が亡くなると源氏方の追っ手から逃れ、横代から城野（隠蓑）へ抜け秋月街道を下り、大宰府で安徳帝・二位尼・按察使局と合流し、冷水峠か八丁峠を越え甘木（朝倉郡）に入った。そこから筑後川を渡って御井郡府中（久留米）へ入り、そして千本杉から簀崎へ行き筑後耳納山麓にあった平家荘園（浮羽郡田主丸町旧竹野村平）の館に入った。

②伊賀平家長が身代わり討ち死に

草野吉木に発心城を構える平家方草野永平を頼ったが、草野永平も既に源氏の軍門に降ったことを知る。草野勢が迫る中、平知盛と乳母兄弟であった伊賀平家長は、もはやこれまでと平知盛の身代わりとなって討ち死にする。田主丸町隈に平神社（平知盛の墓伝）がある。



【平知盛墓（平家長墓）】

これにより一行は山本郡常持へ逃れることができたが、ついに各地にそれぞれ四散してしまった。

④ 山本郡常持（久留米市大橋町）から久留米へ

平知盛はさらに安徳帝を奉じて草野で休憩し山道を下って、常持の「庄の前」（庄前神社）から小舟数隻で筑後川をくだり、久留米の北高野あたりで上陸し、小篠山の豪族：執行種継を頼った。そして立石家の祖：立石義衛門の屋敷下野（鷲野ヶ原：鳥栖）に匿われたという。



【逃避行想定ルート図】

4. その後の安徳帝と平知盛たち

①安徳帝は・・・

『執行萬蔵所有：旧記』によると、鷲野原に遁れた安徳帝一行は、土地の豪族執行（藤吉、藤原姓とも）種継が小篠山に建てた草庵に隠棲させたとする。そして種継の娘珠江と恋に陥り一子をもうけたとかという。

しかし28歳で天然痘により崩御された。亡骸は篠山（篠山城跡）に埋葬され、菩提寺は京の隈（京町）日輪寺とされている。

②二位尼は・・・

船着き場傍の「庄前神社」に一行の安全を祈り、愛用の手鏡を奉納し、筑後川を下った。高野付近で上陸し下野（鳥栖）に辿り着いた。ここに墓陵があるという。

③平知盛の行方は・・・

安徳帝と別れた平知盛は、内田その他の者と上妻郡福島（八女市平）に棲みついた。また上妻郡からついに肥後：菊池、八代へ落ち延びたともいわれている。

現八女市平に知盛の子孫である旧家平隆吉氏宅があり、家系図に知定、知時などの名前が書かれている。

知時は肥後：五家荘に逃れたが、知時の四男右忠儕^{いつき}はある日、平家一門の霊を祀る「尼御前社」の祠を建てた按察使局伊勢（千代尼）がいる筑後の地を訪

ね養子となって、平氏の血脈を伝えることになったという。そして、久留米水天宮初代の神職となった。

④伊賀平家長の妻子の行方は・・・

伊賀平家長の妻は二人の子供（姉・弟）とともに八女市新庄へ逃れた。母の里方名を名乗って服部を名乗り住み着いたという。弟は力量絶倫で荒人と呼ばれその子孫は毎年9月22日に田主丸町隈の平神社（平知盛墓＝実は平家長墓）に墓参している。

⑤平宗清の行方は・・・

平知盛の叔父宗清も筑後地域で安德帝と別れ、剃髪して平家一族の冥福を祈りながら諸国を巡り、その後、下妻郡尾島に棲みつき没したという。葬られた庵は「宗清寺」と呼ばれている。

5. 洪水と疫病の流行⇒平清盛公の仮姿

壇の浦での滅亡から24年後の承久年中（1219年～1222年）に、筑後川の4か所で川が沸き上がり、九瀬川筋に悪疫が流行し人々・牛馬が多く倒れたという。社司：清松重行の神霊安鎮の祈祷の中で、巨大な神体（清盛の仮姿）が忽然と現れ、平家一族は西海の海底に沈み、霊魂はここに留まると宣託した。

このことを聞いた城主：草野太郎永平は、承久3年（1221年）山本郡矢作村に「庄前大明神」の社殿を建立し、その後御井郡常持村の九瀬川水辺に社を移し、「九瀬宮庄前大明神」を祀った。この時の筑後川の氾濫（承久年間）が平家の怨霊となり、祭神が「荒五郎大明神」から相殿に「安德天皇・平清盛・二位尼」へ入れ替わったのである。

6. おわりに

安德天皇は壇の浦で入水せず、平氏の残党に警護されて地方に落ち延びたという伝説（潜幸説）の主なものを挙げると次のとおりである。

◎福岡県久留米篠山町：篠山城二ノ丸 28歳病死

- ◆大阪府（摂津国）大阪北東部能勢野間郷9歳
- ◆鳥取県（因幡国）岡益の石堂10歳で死去
- ◆徳島県（阿波国）栗枝渡八幡神社で火葬16歳
- ◆高知県（土佐国）鞠ヶ奈路に土葬
- ◆佐賀県（肥前国）山田郷43歳で死去
- ◆鹿児島県（薩摩国）硫黄島 以上。

<参考文献>

1. 福岡県神社史・中巻
2. 久留米市史
3. 八女の郷土史 こだし

4. 平家物語四 杉本圭三郎 講談社学術文庫
5. 「cocomiオトナ空間」YouTube
6. 源平海の合戦 森本繁 新人物往来社
7. フリー百科事典「ウィキペディア」水天宮等
8. 立石家据置記 立石家保存古文書 以上

2025年ゼミ・テーマ(変更後)

会員の都合で、下記の通りに変更となりました。

○6月以降の日には暫定です。

- 1月11日：「古代国家の成立Ⅱ：日本国の誕生—
齊藤 潔会員
- 2月1日：女王の国々と狗奴国について考える—
『VersionⅡ』—槌田鉄男会員
- 3月1日：5世紀から7世紀迄の朝鮮半島と倭国の
交流—永井 輝雄会員
- 4月5日：武蔵の古代史—小川 孝一郎会員
- 5月10日：日本語の源流—磐城 妙三郎会員
- 6月7日：最北の歴史 北海道 擦文・アイヌ文化—
倉重 千穂会員
- 7月5日：未定（講演者を募集します）
- 8月：休講
- 9月20日：藤原不比等の足跡—藤田一郎会員
- 10月4日：秘仏とは何か？（副題・善光寺如来はど
こに）又は、出羽国置賜ウキタム地方の古
墳群：米野 博会員
- 11月1日：九州王国、出雲王国、大和王国の盛
衰—増田修作会員
- 12月6日：鉄の古代史：最近の話題
—市川 達雄会員

次回2月1日ゼミ・テーマ

女王の国女王の国々と狗奴国について考える—
VersionⅡ』—槌田 鉄男会員
以上。